

産業春秋

題字 今井 敬氏

マテリアル・トレーディング・カンパニー社長

小滝 秀明

レアアース(希土類)に初めて触れたのはまだ入社間もない1985年。今でもご指導を仰ぐ元上司から、「キドカラー(日立製作所が1970年代に生産していたカラーテレビ)」を知ってるだろう。原材料の希土の輸入を開発してほしい」と言われたのがきっかけだ。それからの8年間はレアアースの輸入を軌道に乗せるため馬車馬のように働いた。

事業の基

しかし長期入院となって挫折。不憫に思われたのか、元上司から「ロンドンで静養するよう」辞令を頂いたのに、最後は現地で独立するという道を選んだ。この決断を不義理と悔いた時期もあったが、レアアースを生業として社会にご恩返ししようとの気持ちを忘れず過さず日々である。



さて、レアアースといえは中国抜きには語れない。レアアースに携わった80年代から親交のある中国の友人も年を重ね、今や業界の幹部として活躍しているのを見るのは何より嬉しい。

だが、家族同士で触れ合い何でも話せる良き友であっても、国の政策が絡むと厄介だ。過去には中国との間で不幸な出来事が発生した時期もあり、その影響で我が国産業界は大変な損害を被った。しかし友は何事もなかったかのようだ。

またしばしば指摘される事だが、一部のレアアースは鉱山周辺の環境を破壊しながら生産される。今後供給を中国に依存する限り、現地での無理な開発や金儲けのための環境破壊はまだまだ続く。顧客にとっては供給事情がどうであろうと、同業者が同じ土俵で勝負をするなら構わないというのも理解できるが、そんな考えが結果的にはソースの一極集中を招いているのではないだろうか。

2010年のレアアースショックから今年で4年。今は沈静化しているが、資源のナシヨナリズムはまたいずれ違うかたちで我が国に危機をもたらすだろう。しかし、我々は何度でも立ち向かう。

心ならずもレアアース業界に生きることとなったが、業界の雄のK氏は「希土の希は希望の希」と仰り、知恵を絞れと鼓舞して下さる。希望の土にどんな花を咲かせるかは心が次第。だから勝負や損得のために終始せず、必要として下さる顧客のため、ひいては人類のために生涯をかけるのだと念じ続けよう。雑音に惑わされず、他人と較べず、とにかく愚忠愚孝を尽くす。結局のところ「徳は事業の基なり」。一つ一つ小さな徳を積み重ねよう。